

## パウル・ティリッヒの政治哲学

著者	阿内 正弘
雑誌名	倫理学
号	9
ページ	37-46
発行年	1991-11-30
その他のタイトル	Die politische Philosophie von Paul Tillich
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/14962">http://hdl.handle.net/2241/14962</a>

# パウル・ティリッヒの政治哲学

阿内正弘

## 序

一般的には哲学的神学者として知られているパウル・ティリッヒは、ワイマール時代に多くの政治的発言を行なっている。ナチスの政権獲得の直後に非ユダヤ人としては最初の追放リストに載ってフランクフルト大学を免職され、アメリカへの亡命を強いられたという経歴からすれば、そうした政治的発言において展開されているいわゆる「宗教社会主義」がファシズムに対する抵抗の理論的な根拠として役立っていた、という事実も理解されよう。しかしながら、他方において彼がマルクス主義の文脈における社会主義を決して肯定していたわけではないこと、さらにルッター主義者として信仰における「決断」を一貫して重視していたことを考えれば、彼のナチスに対する闘争を

理性の立場からの非合理主義に対する闘争と単純に等置することとはできないであろう。以上のような観点から、本論稿は彼がワイマール時代に発表した社会思想に関する論文を、当時の政治的・精神的状況との関連において概観し、その問題点を明らかにすることにした。

## 一 政治的口マン主義と根源神話

ティリッヒのワイマール時代の政治思想が、その到来が必然的であるとみなされた社会主義にルッター主義の立場からキリスト教精神を吹き込もうという意図において提示されたものであることは疑い得ない。その点に関して彼は、すでに一九一九年に例えば以下のように述べている。

「社会主義が—ブルジョア文化の崩壊と反対に—統一経済を基礎にして新たな統一的精神生活および社会生活を創造す

ることを欲するのであれば、それは自律を『神律』へと、すなわち無制約的なものをあらゆる事物を貫いて自由に、無制約的に把握することへと深化させなければならない。それがキリスト教と社会主義とが一つにならない第一の点である。<sup>(1)</sup>

さらにティリッヒにとつては、キリスト教は技術化による空虚さから世界を救い、聖なる畏敬によつて社会主義運動における大衆を貫き、人間を統一させる共同体感情を与えるという点で社会主義とキリスト教は一つにならないという点でされた。他方、キリスト教の立場から見ればそれがイエスの愛の倫理を共同体生活の根本規範としているが故に資本主義と軍国主義体制に反対してエゴイズムを排除する社会主義体制を求めなければならないのであつた。けれども、その際彼によればカトリシズムに代表されるような中央集権的権威主義の上に構築された制度は社会主義のような自律的精神運動を否定せざるを得ず、プロテスタンティズムのみが社会主義を認めることが可能であるとみなされることになる。<sup>(2)</sup> こうした点に、例えばマックス・シェラーなどのカトリックの立場からのキリスト教的社会主義とティリッヒの立場との相違の根源を見ることができるのである。

『社会主義的決断』<sup>(4)</sup>や『プロテスタンティズムと政治的ロマン主義』<sup>(5)</sup>などのワイマール時代末期におけるティリッヒの政治的論文は、議会制民主主義の基盤が揺るぎ、ナチスや共産党の台頭に対処するために大統領の権力に頼らざるを得なかった時

期に、以上のような社会主義理念を実現するための絶望的な試みであつたとみなすことができる。このような観点からこれらの論文を検討して行く時、ナチスをその代表的な政党とした『政治的ロマン主義』をティリッヒが最大の敵であると考えられていることが重要である。そこで、以下においてしばらくこの概念がどのような文脈において用いられているのかを見て行くことにしよう。

その点に關して、『プロテスタンティズムと政治的ロマン主義』の冒頭でティリッヒは次のように述べている。

「政治的ロマン主義は一つの歴史的に限定された政治理論以上のものである。それは一つの政治的根柢、それどころか人間の可能性一般である。二つの人間の根本態度を区別することができるが、一方はその被造性に基づき、他方はその人間性に基づいている。前者は『どこから』の方向であり、後者は『どこへ』の方向である。人間は自らが支えられていることを知っている。それゆえ、どこからへの問いは彼を支えている根柢への問いである。そして人間は自らが求められていることを知っている。それゆえ、どこへの問いは彼に測定された目標への問いである。」<sup>(6)</sup>

人間という存在者はいつもこの両方向への緊張関係の中にあるとみなされる。その際、前者のみが問題とされている限り人間の歴史は土地、血、社会集団の三つへと類型化され得る「根源諸力」(Ursprungsmächte)の結合と闘争の結果なのである。そこでは、「人間の意識はそうした諸力の支配の下で根源神話

的に充実され、結合されている。」すなわち、生じるものは根源から見られ規定されることになるが、根源は円環的法則を内在しているが故にこのような意識においては時間が完全に空間の支配に従属することになる。それゆえ、ティリッヒは以下のように結論する。

「存在論的に述べれば以下のようなことである。すなわち、存在が聖であるが、その理由は存在があらゆる存在者の根源であり、存在があらゆる存在者の基準として妥当するから、ということである。すなわち、存在する力があるということである。最高の尺度なのである。存在はそれ自身で真理であり規範である。存在はその空間の形態と限界を規定する。」

ティリッヒによればこのような根源神話の支配は一方においてはユダヤ教の預言によって、他方においては啓蒙主義の自律によって破壊される。前者は根源を歴史過程の始まりへと変形し、その拘束から解放された無制約的な要請を課することによって根源神話を破壊するが、預言者主義の終末待望においても根源として理解された父性が残っているが故にそれを破壊し尽くすことはなく、キリスト教において根源神話はまた部分的に復活することになる。したがって、根源神話による支配を破壊したのは啓蒙主義の自律意識であるとみなされる。そこでは人間が自らの力で世界を形成しようとするために土地は商品生産の手段になり、空間の束縛が打破されることになる。しかしながら、それにもかかわらずティリッヒによれば根源神話は心的にも社会的にも力として完全に一掃されることはなかった。

心的にはエロス、運命および死という啓蒙の合理性に反する力があり、社会的には、貴族、大土地所有者、農民、手工業者および聖職者のような合理主義的体制の内部への編入を本能的に拒絶する古い諸力が残存することになったのである。

以上のような人間観、歴史観を提示した後で、それに基づいてティリッヒは政治的ロマン主義を以下のように定義する。

「それゆえ政治的ロマン主義は預言と啓蒙とによって規定されている精神的・社会的状況という基盤において預言と啓蒙とに反抗する運動である。」

こうした運動は自らが否定する前提の下で敵の手中にある手段によって闘うことを強いられるという矛盾に、すなわち非合理的なものを合理的に基礎付けなければならないという矛盾に陥らざるを得ないが故に「ロマン主義」と呼ばれることになるのである。

その際ティリッヒはこうした政治的ロマン主義を「保守的ロマン主義」と「革命的ロマン主義」とに分ける。前者は「根源との結合の精神的・社会的残滓を自律的体系から防衛し、可能であれば再興しようとする試み」であり、その社会的基盤はもっぱら大土地所有者、農民、貴族、聖職者、手工業者などである。これに対して後者は「合理主義的体系に対する破壊的な攻撃の中で新たな根源との結合のための基盤を獲得しようとする試み」<sup>10</sup>。こうした試みは勤め人、ある種の官僚集団、合理主義的体系に適応できない知識人たちなどをその担い手としている。さらに彼によれば保守的ロマン主義の基本理念が有機体的なものの概

念であるのに対して、革命的ロマン主義のそれは「動態的なもの」(Das Dynamische)の概念である。すなわち、運動、行動、飛躍、生命衝迫などのようないわゆる「通俗化した生の哲学」に用いられる概念が後者において問題となつていえると言えよう。動態的とは有機体的なものにも機械的なものにも対立する新たな發生(Entspringen)を意味しているのである。そして、ティリッヒがそのワイマール時代における政治思想において自らの対決の主要な相手とみなしていたのは、こうした動態的なものに基づく革命的ロマン主義なのであった。

革命的ロマン主義が発生する契機とその性格は、以下のような彼の発言によってより明確になる。

「それと並んで(政治的ロマン主義の)革命的形態が存在するが、そうした形態は完全に合理主義的体系の中に組み込まれているにもかかわらず根源への憧れを失っていない集団によつて担われている。……伝統は断たれている。また精神的にも宗教的にも合理主義的体系が勝利している。この体系はそれが利益をもたらす力を有している限りにおいては肯定された。資本支配の暗黒面が体験され、プロレタリアートへの転落が脅威となるや否や、それは見捨てられ情熱的に攻撃される。この危機の中で根源神話的な契機が彼らの中で活動的になるのである。」<sup>13)</sup>

しかしながら、ティリッヒによればこのような革命的ロマン主義は、それにとつて發生が問題であつて根源的なものが問題なのではないという理由によつてその出発点から一つの深刻な困

難に陥っている。すなわち、「政治的運動として革命的ロマン主義は目標を決めなければならない。けれどもそれは目標を保守的形態のように過去の伝統からも、社会主義のように現在の合理的分析からも引き出すことができないから、その目標の表象は不明確、曖昧で矛盾に充ち、実践的に実行不可能である。

否定的なものが肯定的なものよりもはるかに強力である。運動の力はほとんど運動の中のみあり、それが導かれる所の希望の中にはない。」<sup>14)</sup>このように否定的性格を有する政治的ロマン主義がタート派<sup>15)</sup>に代表される保守革命論やナチスなどのような形態で現実に大きな影響力を行使していたことがティリッヒにとつてワイマール共和国の最大の問題点であるとみなされたわけであり、彼の政治的論文はこうした文脈においてとらえられなければならない。けれども、その際重要なことは先に見たように根源神話の力を完全に一掃することが人間にとつて不可能であると彼がとらえていた事実である。このような観点から見ればブルジョア原理もまた一面的である。それゆえ人間存在の被投性から出発する政治的ロマン主義はその点においては正当であり、ただ根源を位置付ける方法において誤っていることになると言えよう。

いずれにせよ、彼のキリスト教社会主義は実践的には社会民主党を改革することによつて政治的ロマン主義、特にその革命的形態の勢力に対抗しようとする彼なりの試みであつたとみなすことができる。そこで、次章においてはその実現のために彼が提示している具体的な戦術を見て行くことにしよう。

## 二 宗教社会主義の戦略

テイリッヒが社会主義者としてブルジョア原理を基本的にすでに崩壊したものとみなしていたことはすでに前章で見た。しかしながら、他方で政治的ロマン主義者のようにそれを一面的に否定してしまうこともまた彼にはできなかったわけである。

さらに、ワイマール時代の議会における諸政党の権力関係は錯綜しており、そうした事情から宗教社会主義の具体的な戦略はきわめて複雑なものになるのである。

以上のような観点から、テイリッヒは西洋ブルジョア社会の状況とそでの社会主義の位置を分析する。彼によれば、前章で見たような根源神話に対する攻撃を宣言するブルジョア社会は、一方においては自然的調和を信仰する自由主義を産み出し、他方においては自然は理性に従属しなければならぬとみなす民主主義を産み出す。しかしながら、後者の立場も自然が理性によって支配可能であるとみなすことといわゆる「形而上学的調和」を信仰しているわけである。いずれにせよ、ブルジョア原理はこうした自由主義と民主主義との相関関係においてとらえられなければならない。すなわち、個人の選択意志から理性的なものを實現する前提は自由であるから、「自由主義的契機がなければ民主主義的な進歩の希望は単なる奇跡の信仰」になり、このような観点から見れば「民主主義が自然的調和思想を放棄しようと欲すれば前ブルジョア的で根源に拘束された諸

要素に頼ることを強いられる」とみなされるのである。そしてワイマール共和国の時代においては企業家が権力集団と結合し、調和思想は政府の干渉や社会主義的制限の試みから既得権を守るためのイデオロギーへと転落する。したがってそこに政治的ロマン主義の保守的形態が再登場し、自由主義から新たな封建主義への道が開かれるのである。

テイリッヒによれば、こうした状況において社会主義の立場は複雑である。なぜなら、ブルジョアが前ブルジョア的諸力と結び付いていることによって、それなしでは社会主義が存立できない。「プロレタリアートは、自らがその力によってブルジョア原理と闘うもの、すなわち根源を否定せざるを得ないし、プロレタリアートは、自らが破壊しようと欲するもの、すなわちまさしくブルジョア原理を肯定せざるを得ない」からである。彼によれば、このような二律背反は「プロレタリアートが自らの位置を意識し、はつきりと根源の諸力の味方になり、けれどもブルジョア的になった根源諸力やブルジョア原理に反抗する場合にのみ」解決され得るのである。

さらにこうした社会主義の内的矛盾の具体的な表出をテイリッヒは六つの側面に総括している。その点に関する彼の論述を以下で少し詳しく見て行くことにしよう。

第一に、社会主義的信仰は世界が合理化可能でありそれによって人間の自然的目的にふさわしい世界を創造し得るとらえている一方、内在する調和というブルジョア原理を放棄しているが故に、それに代わって終末待望を措定することになる。

したがって、社会主義は一つの預言者の告知の契機を含んでいるが、他方預言者の欲望の超越的解釈によってその革命力を奪おうとするブルジョアジーに対抗するために終末待望を合理的・此岸的に説明しなければならぬ。こうした矛盾を解決するために、「宗教社会主義は社会主義の中で作用している信仰を意識化し、その内的矛盾を暴露して象徴の力による解決へともたらす」ことが必要であるとみなされるのである。<sup>20)</sup>

第二に、社会主義は現在においては人間における理性を前提とし得ない。それゆえ「非・理性から・理性への跳躍は何によって媒介されない。」ブルジョアジーが同盟する前ブルジョア的人間観は、そこに真理の契機があるにもかかわらず、結局階級支配に奉仕するから、ここでも社会主義はブルジョアの人間観を擁護しなければならなくなる。

第三に、社会主義の目標は国家、権力、階級の除去であるにもかかわらず、「現在においては、未来に権力が権力を断念し得るために権力が権力と闘っている。」<sup>21)</sup>しかしながら、権力を獲得する集団が自発的に権力を放棄しないということをプロレタリアートの歴史は証明している。

第四に、ティリッヒによれば、「宗教が人間の存在の根源からの生を意味するのであれば、社会主義は宗教的である」<sup>22)</sup>にもかかわらず、社会主義は宗教を他の領域と並列的に存在する人間の表象や行動の一つの特殊領域としてとらえるブルジョア原理を採用している。

第五に、自由主義による共同体生活のアトム化は個人の権利

の承認、さらに根源との拘束の止揚という肯定的結果を有していた。けれどもブルジョア社会は自由化を自らに必要である限りにおいてのみ行なった。それゆえ、基本的権利を否定されたプロレタリアートはブルジョア原理の徹底化の要求を強いられただのである。それにもかかわらず、他方で社会主義は共同体理念を提示しなければならず、さらにそのためにブルジョア的な自然的調和信仰に訴えることはできない。したがって、社会主義の共同体理念の実現のためには根源諸力に頼らなければならぬのである。しかしながら、このことは同時に社会主義が封建的イデオロギーに接近する危険を有している。

最後に、経済領域の中にも社会主義の二律背反が存在している。ティリッヒによれば、階級支配、帝国主義戦争、プロレタリアートの全体的窮乏化などが自由主義的経済秩序の結果であるにもかかわらず、ブルジョアジーと前ブルジョアの諸力との結合によって市場経済の混乱が引き起こされた場合、「社会主義は合理的に活動する経済を通じて可能な限りの多数が可能な限り良い生計を得るという要求を受け入れざるを得なかったのである。」<sup>24)</sup>他方で社会主義が本来提示する経済秩序は、自由主義経済が恐慌を招くという経験に基づいて、市場を自由な力に任せるのではなく純粋理性と一致した人間による市場の規制を求める。しかしながら、プロレタリアート内部においても数多くの利益対立があるという状況において、経済過程の尺度とされるべき純粋な経済的理性がどこから生じるかということとは不明確なままであり、ティリッヒの見解では根源諸力への回帰と

いう可能性のみが存在しているのである。

他方、敗戦と革命の結果として一九一九年に成立したワイマル共和国はティリッヒによれば以上のような諸矛盾を解決することがほとんどできなかった。彼にとつては、共和国はマックス・シェーラーなどと同様「単なる小屋か間に合わせの建物に過ぎない」ものとしてとらえられたのである。政治的・経済的領域において旧勢力はなお強固であり、すでに最初の五年間に至る所で反動が始まっている。それゆえ、ワイマル共和国は新たに基礎を据えるための準備期間としてのみ肯定的に評価し得ることになる。こうした見解は基本的には彼の民主主義観に基づくものであると言えよう。すなわち、先に見たようにそれがブルジョア社会の中心的原理である限り、ティリッヒは民主主義を絶対的な理想とみなすことはできなかったのである。その点に関して彼は次のように述べている。

「民主主義原理とはまず第一に矯正策（Korrektiv）である。どの集団が社会的権力に就くか、ということは民主主義的手段によつては決定され得ない。そのことは社会に対しての集団の意味によつてこそ決定される。」<sup>(26)</sup>

それゆえ、「社会の構造を支える根源諸力とそうした諸力を正義の要請に従属させる民主主義的矯正策との間の緊張の中に社会主義国家が構成されなければならない」のである。さらにこのような観点から見れば、「形式的な平等は自然的でデモニッシュな不平等によつてではなく、聖なる神的不平等によつて占取され突破に到るまで充実されなければならない。その不平

等は神律的な力強さとエロスの力との緊張に基づき、まさにそれゆえに主観的恣意の権利ではなく本質的な展開の可能性を意味する自由と同一である」という彼の発言の意味も明らかである。ここにあるものは、マックス・ヴェーバーやシェーラーなどの政治思想と同様、形式的な民主主義において実質的な支配力を行使する指導的エリートへの希求である。

一九三三年にティリッヒが『社会主義的決断』<sup>(27)</sup>において提示した宗教社会主義の具体的な戦略は、今まで見て来たことから初めて理解可能になる。すなわち、思想的側面において社会主義は宗教的であり、根源との関係を保たなければならないとみなされていたが、こうした事情から彼によれば現今の情勢においては「革命的プロレタリアートと政治的ロマン主義の革命的集団との結合の達成が努力されなければならない」のである。こうした努力は根源に近い集団の多くがブルジョア社会に否定的になつてきただけにおおさらであつた。さらにこのような観点から見れば、第三帝国という象徴によつて表現される「中間層の革命的運動が自らを社会主義的と呼ぶことは単にデマゴギー的に理解されてはならない」のである。<sup>(28)</sup>

その際注意されなければならないのは、ティリッヒがこうした主張において自らが批判した革命的ロマン主義の立場に接近していると単純にとらえることはできないという点であろう。すなわち、彼にとつてあくまでも「根源神話の支配は暴力と死の支配を意味する」のであり、政治的ロマン主義の根源諸力が社会主義運動に奉仕して初めて西洋は野蛮主義への転落から救



済されるのである。しかしながら、いかにその背景が理解できようとも、ティリッヒがここで提示している戦略は、ワイマール共和国の権力状況を考慮に入れた場合あまりに非現実的なものであるとみなすことがきよう。実際、ワイマール共和国の首相としてはヒトラーの前任者であったシュライヒャーは、体制を維持するための最後の手段として一方において労働組合に好意的な態度を示し、他方において政治的ロマン主義の革命的集団、すなわちグレゴール・シュトラッサーを中心とするいわゆるナチス左派との同盟を計画するが完全な失敗に終わっている<sup>35</sup>。シュトラッサー一派は現実にはとてもヒトラーに対抗できる實力を有していなかったのである。このような観点から見れば、ティリッヒの主張はナチスを過小評価し、いつでもその力を自分のために役立てることができるといふ、ワイマール共和国において知識人から政治家にまで及んでいた悲劇的な誤解の一例であるとみなし得る。それゆえ、ティリッヒが提示している宗教社会主義の戦略は、それが「悪しきものの力」を一九三三年においてなお封じようと欲する最後の試みであったとして<sup>36</sup>、現実の力の前には無力な知識人の夢想であったと評価されなければならないように思われる。

## 結語

今まで見て来たことから、ワイマール時代におけるティリッヒの政治思想の特質が明らかになったように思われる。そこで

われわれが指摘しなければならないのは、彼が提示している現実的な戦略はあまりに幼稚であったにせよ、その前提となっている彼の人間観自体は真剣な検討に値するものであるという点である。すなわち、最初に見たようにティリッヒは人間の存在を根源への依存と無制約的要請との緊張の中に見ているが、その際根源が非合理的な力としてとらえられている限り、ここにあるものは疑いもなくマイネッケ、シェラー、トーマス・マン<sup>36</sup>などのいわゆる「理性の共和主義者」たちに共通する問題意識であろう。彼らと同様ティリッヒにとっても西洋近代はそれが根源との接触を失い、いわば疎外の中にある限りにおいて克服されなければならないとみなされていたが、他方保守的ロマン主義者たちのように単純に根源に回帰することも、さらに革命的ロマン主義者たちのように運動の中のみ生きることもできず、それゆえ近代における自律的個人の登場を認めた上で根源との接触を回復することが最大の問題であった。こうした出発点は、ティリッヒ自身が挙げているフロイトやユングなどの深層心理学による知見を認めるならば、基本的に正当であるように思われる。実際根源神話との関連において思想をとらえる彼の図式は、ワイマール共和国の政治思想を理解するために研究者たちによって利用されている。

しかしながら、他方で彼の思想がシェラーやトーマス・マンなどと同様現実的には無力なままに留まっていたとすれば、そこに共通してあるものは人間における創造的であるが非合理的な無意識の力が、理性の力によって簡単に制御可能であると

とらえる人間学的楽観主義であろう。このような事情は、シュルガースが述べているようにティリッヒの人間観に悲観主義とみなし得る側面が存在しているにもかかわらず、<sup>(38)</sup>政治的ロマン主義における根源諸力が社会主義に奉仕させ得るという先に見た主張の中に明確に認めることができるのである。もちろん、彼においてはその後ルッター主義的なキリスト教信仰が存在しているわけであるが、このように何らかの究極的な秩序を信仰している点に理性の共和主義者全般に共通した一つの問題点を見ることが可能であるように思われる。

## 註

- (1) P. Tillich, *Christentum und Sozialismus* 1, in: *Christentum und soziale Gestaltung*, Ges. Werke, Bd. 2, 2. Aufl. (Stuttgart 1962), S. 25.
- (2) ebd., S. 25 ff.
- (3) シェーラーのキリスト教的社会主義については、寺尾誠編『温故知新』（慶応通信 一九九〇）「四一ページ以下」に所収の拙論「マックス・シェーラーの社会思想」を参照。
- (4) Die sozialistische Entscheidung, in: *Christentum und soziale Gestaltung*, Ges. Werke, Bd. 2
- (5) Protestantismus und politische Romanik, in: *Christentum und soziale Gestaltung*, Ges. Werke, Bd. 2
- (6) ebd., S. 209.
- (7) ebd.
- (8) Die sozialistische Entscheidung, S. 238 ff.
- (9) ebd., S. 246.
- (10) ebd., S. 247 ff.
- (11) 「動態的なもの」という概念については、藤山宏『ワイマール文化とファシズム』（みすず書房 一九八六）「一八四ページ以下」を参照。
- (12) この概念は「アントハイマー（Antidemokratisches Denken in der Weimarer Republik, München 1962.）に基づいているが、具体的にはルトヴィッヒ・クラークスの思想などを指している。
- (13) Protestantismus und politische Romanik, S. 211.
- (14) Die sozialistische Entscheidung, S. 249 ff.
- (15) タート派については藤山宏の前掲書一七五ページ以下、さらに E. R. クルツィウス『危機に立つドイツ精神』（南大路振一訳 みすず書房 一九八七）「三一ページ以下」を参照。
- (16) Die sozialistische Entscheidung, S. 268.
- (17) ebd.
- (18) ebd., S. 282.
- (19) ebd., S. 283.
- (20) ebd., S. 285.
- (21) ebd., S. 287.
- (22) ebd., S. 290.

- (23) ebd., S. 293.
- (24) ebd., S. 302.
- (25) P. Tillich, Die Geisteslage der Gegenwart-Rückblick und Ausblick (1930), in: Die religiöse Deutung der Gegenwart. Ges. Werke. Bd. 10. (Stuttgart 1968) S. 109. シェーラーとワイマール共和国の関係については、前掲の拙論を参照。
- (26) Die sozialistische Entscheidung, S. 346.
- (27) ebd., S. 347.
- (28) P. Tillich, Grundlinien des religiösen Sozialismus, in: Christentum und soziale Gestaltung. Ges. Werke. Bd. 2, S. 113ff.
- (29) 実際にはこの論文は一九三二年に完成していた。
- (30) Die sozialistische Entscheidung, S. 334.
- (31) ebd. ナチスが主としてプロテスタントの中間層によって支持されていたという事実に関しては、野田宣雄『教養市民層からナチズムへ』(名古屋大学出版会 一九八八)の議論を参照。
- (32) Die sozialistische Entscheidung, S. 365.
- (33) ティリッヒもまたグレゴール・シュトラッサーに対してこうしたはかない希望を抱いていたようである。Vgl. NJ. Schürgers, Politische Philosophie in der Weimarer Republik. (Stuttgart 1989) S. 332. ナチス左派については、藤山宏の前掲書二〇七ページ以下を参照。ただし、その見解に対して中村幹雄は『ナチ党の思想と運動』(名古屋大学出版会 一九九〇)一〇〇ページ以下において異議を述べ

べている。それによれば、ヒトラーの思想それ自体の中に社会主義的側面が見出され、それゆえナチス左派などというものはそもそも存在しなかったのである。

- (34) こうしたナチスに対する過小評価は右翼の側も左翼の側も同様であった。この点に関しては、例えばK・D・ブラッハー『ドイツの独裁』(山口定・高橋進訳 岩波書店 一九七五)、七八ページ以下を参照。

- (35) Vgl. Schürgers, Politische Philosophie in der Weimarer Republik, S. 172.

- (36) トーマス・マンの政治思想に関しては、拙論「トーマス・マンとワイマール共和国」『倫理学7』(筑波大学倫理学研究会 一九八九)を参照。

- (37) Die sozialistische Entscheidung, S. 234.

- (38) Vgl. Schürgers, Politische Philosophie in der Weimarer Republik, S. 167. シュルガースによれば、ティリッヒにとって生来人間は他の人間を支配しようと努める権力に飢えた存在であった。彼の見解は部分的に正当であるが、他方で指導的エリートが信仰においてそうした問題を解決し得るとティリッヒがみなしている事実を見失っているように思われる。すなわち、そこにあるのは大衆に対する悲観主義とエリートに対する楽観主義であると言えよう。

(あうち・まさひろ 淑徳大学非常勤講師)